六家集

拾遺 上

定家卿

拾遺愚草上

百首奇

初学　二見 四位上人　大夫

閑居　早章 二度　花月

千題　歌合　院 初度

同 千五百番　内大臣家 建保三年　内裏

院 建保四年　開白左大臣家 貞永元

已上千五百首

初学百首 養味元年四月

詠百首和歌

春二十首

侍従

いけるはのあれしひかりは四方の海の波まもなしや春立ん
釣舟屋にはつかしくは春めくは小山や冬のとまりなるらん
菅のたつの紙杯よさかられてはるけき物へよ千代をへぬ
宮のうちはいかてあしの雨し菅の志をそ梅の志るへなりけれ
梅の花柏紙なへてぬくはよ定さへよりしかれ明かの
なかくはよもよ見へる梅の花はたまはそはつる歌の本のりと
春雨のたれけり定よ風ふけてもとも先まもかへて鳥ね
くるさめの志をしぬれていなけしの庭よみてるまもそきの

としの山ゐの紀梅のさきそめて冬とも海さの雪も此白色
花ゆへに表ハうき世そあし海ゐしおすし山路にふ海よへ
いまへの人にみせしや梅をたれはさしそハせひをきけめ
あつさち表ハ山路も都とそなきむの白ひ紙暑いりとて
とし紙へておすし梢にさくむ此なりしなきもひるるん
都へハなへてにきにまりにわ梅紙おしぬ人なけれ
なくにおしきもとめし試なしてたる人なきやとの梅ハ
風なしてふと紙ちれ梅むとうき梅にさにおしひを見へく
表此にはなるて弱ハ雪と此ちわかふむに人やゐとへ
ひなるにはむやちるしんよし脇山白ひ紙そふ漱の白玉
としなへて笑の梅やちわぬしん白取にるるよも此山風
うしみてもひとそなけきむ表のへるをしたこと也は

夏中首

あしむまもんなるへにに奴りとさへ此名紙とあるさらん
うのむにはよりのひわをてしさせて月にかりしぬ玉川の里
としぬときしらへわ音ならぬ梅にまつ垂るて郭ひなる
梅のむちる風にあしねとも梅くにしかりわやめ草なる
五月やこくし奴の山此郭ひなのなる者にはなれうなき
すきぬる紙うしみにてし郭ひなるさりしさに人も待らん
五月海にそしみもくれぬるわしかり川にしし渕をやかわらへん
さこされに水なこ海さる海こと草にみりしてのこ明る夜此歌
松川やうきし山にはなるしいうしハ夜此笑をて涼りなしめ
夜のりのいる山みちをしるへにて梅の木末に秋風吹

秋二十首

りつとよみ侍さし原居さて毎ふく風のとゝまさけ也
しひ出る来の松山すゑ風てゝ波こゝしたちさしさわきや
恵ひらされ身持りやさしさ人やわるゝぬねをのゝそれく
いふをむうきまつけてゝ浮しきまゝ思ひやむへきつらさねね

雜二十首

神祇

かしこゝ山若れ夜なゝ立へわ花さくまゝにあつまりかな
しひのゝ大原の人に年へあるまつてとうへ神れ出るは

釋教

法師恥

なれきてちらく水に出るきなまつのくへきむねの道し

秋の草恥

うき世にはうまへのやのしけれも人のんに月そ入るゝ

秋刀恥

さしめけり佛の名をしるへてとはうき世に聞とはすかな

菜刀恥

此すめてうきゝく法れ花の名れ深さあさしは知人もなし

勅教恥

きくつの花の法れを忘ましそさしめときけり成とも知れ

世常

なめてさしめなる行世れなるしきは時毎にくりかわ明れ元
あのうへにしひるすゝそとうなれやうそきゆをあけとみなる

別

ワれてもんあさけなる猿衣いく人かきなる山後なりしも

猿

[illegible]

猿の[illegible]山の月[illegible]

猿

[illegible]

物名

さしくし　ひかけ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

半臂字不可然初学已被[illegible]不可直改

[illegible]

述懐

[illegible]

二見浦百首　文治二年四位上人勅進之

詠百首倭哥

春二十首

侍従

しめしや海られて時ゐるそれがあらぬかむ海の見
さみられの雲れあるさをも月れあられのこせとかりさいる
夜海のきさくらうさしさは水せきて公れがと紙風にみゆる
る紙志りしさそやハあきん夜の夜れ志とす波に月ハやとり
大井河をられ梢のあを紫にわ公にみゆる秋れ夜く
清きさ浦をんのもろこ志とうかゆて梢にみゆる此下陰
夜そしる山井れ志の野ゆきて雲すし木陰にむすし鉄ハ

秋二十首

夕ゆ暮秋れ行きにまるる海に袖にわ雲ハときけり鶴と
ワすれつゝむしとんつゝ夏と又秋おとろ守おきれハ風
これとこれらき世の夕をあらきなく秋れ空雲れ左れ上雲
秋のきて風のこしらし完とこにとしへ人なきやとの夕雲

ゑるこ世はなるもとみちもなるわたわ浦れとさやれ秋の夕れ
秋といへる人の心にやとわきてすつに夜ゐぬ月れけれ
いつるよりそう月けの清兄かと完さへこれるなこのこ人の
ひとりしに月にこ雲月にきさせ秋の夕きハ完にみれわ
なるあしとせひし西とあさちつに風ゆくやとの秋れ夜の月
秋のこうかけゆく月になるめして雲うしき世ハせひれとも
あゆ河のひしれ此こうハ秋れ夜の月ハこれ世にまる紙ゆかり
雲そもりさるんにれこう月にさへあらぬひしとそつ秋な
夕やこに成ぬとおりへハなる月れ月まつまにおしき秋の
おりこれ秋の夕しきハくれそこと山のこれあゆ河の月
さつゝわれやこ井のこ志ハこうかうまてあけこちうき天れ河雲
山うつの所れ海めにしけ夜此へ秋のあられとも海にす

志ろつゝわ繋し中もかわりこの世ハ人をとるのみ
ひゝあら常しきことはいとゝ面とかれて悪くそ為ハてゐれ

述懐 五首

見しハみなむしとかゝる夏ハ風ちよゆゑろれぬハんとかわ
とのつゝあれハある世まなるゝつてあしむと人まみぬ人きに
見るもしなりしてもくるしかするゝてなるといふ人をあのひそ侮ん
あわいてぬ者をさそと知すしらるゝ世俗的くすに
月のいるを秋のくるをあしみてもあまはつきてしまふんう

世常 又 首

面かりよ夏とはいくし世中ハかくてきしみるとうきこれ
としなへて世ハかわらぬの弟の面くしむすふさもしまきあり
世中は無かけやとすます境見るをありとはこの世人は

あすハうん面てゝ極道もへ此世のなきつれなるゝぬ人
人志れぬ人のんのうしてとかられハうちこの世之かわ

雜

神祇 又 首

さやうなる月日のかけまあたりても天照升をとのむかわそ
なるくまさしてにいくしみるさ山ハ山ハ神もしるしん
まくことにハ面のむんそすゝ面さ此ハ此ハみさしの
うきてともなくさむ道ハしるへとや世をすみよりあ面て
いるしんみる此山りし年面りてさり秋ハ蓄うさのうん

暁

志のあと四方ハ弟よりも志ろう面ていうよ繋て夜のとらん

夕

夜
山家
田家
山
河
別

されさのみ花のひも遊ぶまよひもりしをりて菜木の上露

陵園妾

皇后宮大夫百首文治三年春詠進之

詠百首和歌

侍従

春十五首

けふ人の袖とつらねむさきの庭に雪やまたふる玉ぞしかん

雲こえて霞ハたちぬみよしのにけさ年をこえて山のハ梅乃花

嵐の松に若菜つむ雪ハまつ雪あさ白妙にまつこゝのしら

梅の花まがひのえだハ雪にあらぬまよひをちらさそえころ

冬過ぎる松の木の間の霞の日ぞそれはあるさきすさし子

あさみどり霞みむさきぬ春雨にひとつの梅柳しらず

秋旅とてゆし雁の羽風のなかにきりにかけつの花

春のそらにほひわかれんいつまでも花の露ぞ袖にかゝれ

白妙と雪に梅ほさそひてん山の月くもかくしよ

霞みにし花はけすまの奈良や梅み見春乃かきの

雪とひとのつね乃桜むすびとするまを見し月

いかみてきけも桜ちる花のふけさ春の衣とぞふん

こゝろへの色のいろに桜ちらむしき春のかぎりをこと

梅りしそら庭の苔地に春雨そひ来さしのぶ花の白雪

あつさらへりあらいそひさしもんさそさや涼で春のうら

夏十首

いつしかとけふおもふ袖にも花乃色のころもかへらん人のうらやましき

あけぬとて口れ見に面さわやりつゝさゝ鶴へ[illegible]
とし月ハとれ[illegible]面くつりとゝ口すつゝとゝ[illegible]やおし
なくしもむしをハさわかわおきわゆへなまあけ面[illegible]
うきなかすゝあそのぬてれあとなかうくらんれれしハみかわ
よとしもよ思ふなけきれなくさぬハ口すし面名れこえぬ事や
なれうゝさ世まさしことのくらかつもりの笑とまりハ
うきれ程志ふんのうつしぬやさゝ笑れ面のこなく
口すれぬやさゝ忘かつ口ひ笑まなやとそいひて別
ふつるわよしさてさゝハなるしへまされこおさるる言ゝ姫と
なれひの見志しぬかわね此立口れあしれ[illegible]

寄名不乗十首

龍しくよ此山の獨むあるぬんハかゝわさあまま

いけてれこ年ぬか乗れ[illegible]川やとせ[illegible]和よみなさう
此月ハ[illegible]すれ[illegible]しそ口すつ人れこ口れ山りと
清見ゝ宮りなまるとゝんロれわすくらひありやと
波こさん和とゝ[illegible]さすれ松山さつ[illegible]みれわ
塩ゝ面乃こゝみまるれてこゝろかゝきりひとまれひとり
なるねみよさしゝの月なくさぬかぬかんしや
いそ程口そまかけてむすひみん面わそ年れけれ
波やくりみちくなすす[illegible]田川こゝとすれハうくる文な
ぬのひさ乃[illegible]ねさみよ面なくまちるこれ人の

雑意十首

[illegible]令とそそ言よくつゝさ[illegible]
くなくハ[illegible]しあしへよわみちつる塩れ面さゝひは

さもこそハみすまし神の人すしめ恋よ心のまよひくらん
是非とハゆるさとも法のためかう神の世にそらしむら
とにの海の神の中より海のかやとかす人の心をとる命
こみいとさまよておもハねおけたゝまほろしなハ
うひさの海うらなけさハ宮すてゝそれとよみのやとのよ
其海の御神袖よ吹こす浪のをとおとすれ私の法の心ます
みくまのゝおかられし露のまゝにもようもめく命のゑと
おひくそまる紙も来る心に命や恋のかきりならん

探恋五首

恋ハのゝ花らの宿よやとろんかきの袖やさまよひと
黄山やけめよむまい志のまゝおて別しかゝさとのゝ
草よ海くらちりみらてれひますまる別らぬとよいよみん

うつゝよ人宿も宮まてつれなくもそのうちおまの袂かな
ひすはやれ見さゝゆき絶ぬ人よりも雲のへよ立さこゆる也

寄法文恋五首

人天交接両得相見

人の世とのみもおもひかんはかりや恋のるハおもへつゝ給ふ

我不惜身命

あらさらやらさ思ひとおもふむこ命とさてん恋の山へよ

又如浄明鏡

ほのすむ人よ我ゆくにみえしやさしてま恋きけやみゆ

如貧得宝

実なるとさてうけへこしかね命のからん人の契なれや

又如一眼之亀値浮木孔

[illegible]

閑居百首　文治三年冬与越中侍従詠之

詠百首倭歌

侍従

春二十首

[illegible]

[illegible]

奉和無動寺法下早卓露膳百首　文治二年春

詠百首和歌

春二十首

立春

侍従

霞

毎らくすよくめハ雲乃霞まて宮まそこりかゝれ山里

鶯

鶯乃やとしめうむ鳥くれ行に海と梅なれぬ口しなくも

若葉

いさゝふはおすの雲面海ゆとも空ゆれ口るみてさくん

紅雪

梅みしてくとゝろうしてまたいりてゞつれかゝる雲れ雪に

梅

こそまれ雲乃まりひはなりまり梅さく岩れかけれの見

柳

年くとさみしりれ京まし乃紀る雲くるゝれ岸の雲柳

早蕨

岩そくしたるも雲れ上毎てしかや出つゝ岩れ早蕨

花

いりそもしておの梅なれてうき成ゆさそしかりひらへ

雲面

雲の頭紅面とゝ川面に梅にのて紅れ色れ色を結ぶ

雲鶴

そらうさや花にはくへくもし鶴れ上ゝ雲るなるさ口しる

海鳥

雲面うこしらにかれへる山なしそ霞にそれなりかれ

喚子鳥

おりひさ川乃れ出るへるよふことり梅るき山へに今さそふ也

苗代

ぎるれたる所に陽ゆやんなりしろ此水にやすいハ引へてり

莖

[illegible]

杜若

[illegible]

菱

[illegible]

歎冬

[illegible]

菖蒲

[illegible]

菱十又首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菱

[illegible]

[illegible]

菖蒲

[illegible]

早苗

とるるへのかやく月日はこはりけれ[illegible]なく

照謝

春ころも立田の山よりしすといく[illegible]

[illegible]月毎

むかこのみやくへのとつそさしてけしつさきれの見

盧橘

故ぐは花橘なるめしてみぬ行末をそたらるしま

雲

おるひく川そひ柳ふる風まやつみりしはかりたくり

散遣火

人はそむしといはみやるやり火れ焼をあのむをられ茶垣

蓮

こ乃世まもけ世れものとみしぬる蓮の房まやとる月新

氷室

氷室山雨をしらぬれさしぬれ方れせるれけれそ[illegible]

泉

山かけの岩ほ乃志みけぬるよれんのうち[illegible]人や[illegible]

慧和殺

[illegible]殺しあ年[illegible]

秋二十首

立秋

みしろ山々ふるは秋れあつるひめいつれ[illegible]下紫[illegible]

七夕

七夕乃あるぬ別れなみまや秋白[illegible]

萩

さほまたわ野へ分そむ分こそあるまゝ出れ孫みちの秋萩のさな

めの郎ひ

とみまへしるひくたまや秋風のつきて成りしむ冬なるらん

薦

志のふ山さそのくすまいけるわ秋れさわ紙ひまふらん

苅萱

とつゐれん庵乃かりや泣なるへやこりわれそれわ

蘭

梅ちとる海わしぬ草まくもかりの海て夕分こゝめ分かへれ秋風

萩

こかれぬの分とは神よやしとまて萩のたむすふ秋の夕せ

隅

草かれのわ此家は風すきてさしひ元は初尾れなく

廉

廉乃ゐはつさふ此あれて岩れたまは秋のこやるん

房

くつさハ志りかゐりの房うひくもつ分へは夜ハ小けは行り

旁

秋ぬくきまさ川岡此隅りのハおりふそすれそ此をみす

樓

されそれとりしぬ物ひ然ハさけりあきかゝ房もさなる

弱道

主はしくきわはしの弱こゐれしとゝ入れぬさき此はんと

月

秋ふてと秋紙くれぬ世をさしてもまさ月の名にしたる

擣衣

きのりしあれ秋ゆきまつ秋

虫

うしめしやくしなき虫れ立まさ人間ひとつ秋ゆくれ

菊

又とめし花すゝ秋ゆきまつ人あきに庭れ菊

和紫

とよや海に山乃濁てとは時雨も空可見木を立ゆ道

九月盡

わらきりしき世をなすし世中そ秋かきりと夜ふけぬ

冬十八首

初冬

うきくらす木紫ハ見ゆ紙ゆきまて冬の風

河海

月ハさしとゝ木紫なるりせて志のひまくらむ時雨

霜

とうへをぬ竹さへ冬れみぬまて夜とは雨紙並口すん

雪

ゆりとめし元ハ雪けなりまてぬ人を隔て冬れ山里

寒

霰ゆり日さへあれもまれ紀れや乃心もしらぬ山あらしな

寒ゝ芳也

こりわ江乃あし此下なり乃ゝきさ[illegible]わしをぬ世此あいきなの成也

和鳥

あくらし海和鳥さいとうとしてとまいふひなく地そなるしき

氷

とけぬうへまかさして氷ゝ苔水まさゆゝ夜此物そみなり

水鳥

そのかすをしたくけ此霜ぬく消ぬ物紙みゝそなるしき

細代

いとしろあしろまひを此よりくハ風さへもやきうら此川をを

神示

ぬらうへる山あぬ此袖に霜さ代あつきふきあさくらの上

鷲鳥

かり衣をしぬぬりし此をりりまそかさ此原に雪をふきぬ

炭竈

むさゝ海乃あさり紙ぬるゝ立のかり煙や表ハまつ手むん

燈火

ゆゝさ乃をひ乃志さるゝうゝ火此物引とく新くなる年小

歳暮

年くれぬかゝぬ々ふ此見てとまうき紙さぬるゝ四ちのこ

遠干首

和恋

これもしちきわなるゝむとかりにせひかゝつ成をあしむ

無恋

せひ祢乃夏まはくなれぬ風無ひもあしをぬそなるし

不逢恋

なりにけるいはしまさへ人の恨ゆゑに

初逢恋

あひそめてもいへんかなしきちきわかしくもあるまゝ夜の夢

夜鶴恋

ワれつゝかなしきくく雨とかれてゐのめぬ蓋をおいたくに

逢不遇恋

つゝかしすワの雨まもしれまき別てまれぬなけさせんとは

猿恋

雅ゆへとさしぬさひしれ高さに郡の方ハなかしおと

思

さしさしハ人もあれ紙けてかんよさひよきんん穴のうきや

片恋

よしさしハ衣なけそさのひとひ所をこそすそめ恋ゆゑハ

恨

紙紙をれうしみしさしに世中紙ありゆゑ雨の心よハさ

雜二十首

暁

うしりそゝ物さしに此の暁ハ人をもとゝもとの世なしても

松

松風乃楢の夕をつれすくそしすまつりハなみたすりかり

竹

くれ竹乃ワの夜をみなしへしも光よそそうれ此やしな

苺

松く山乃いはしの苔はよとしのゝ久しかりぬるはさとまつ

霧

こゝちしの乃ん岡まはけのこしや秋ゆゑ霧の立ちなしき

山

雨こしの山のあるさまに宿めてうき世へとつかせかとも見ん

川

もつ川にしみなれ乃消へわれるこ世とも松なけくかな

野

此乃ちてはけ世つわと知てさまちなりつき野への旅と

冥

くらへらや清見ゝ冥まよりの時も抱せし袖はさちや海さりと

橋

此れしさはくあらの橋もけこしと来ましとゝ夜間と冷

海路

さつ人あらはいそうん再出してむかけ此せとゝ松わしとも

猿

みやことてさわしの袖もなるゝ夜を何とひ此の房とすらん

別

かへりさ此笑りけれ此あしむまもつ此衣知ぬへき世を

山家

山さと此こハかきわとこつねとも一りさるしの夜や雨たん

田家

いゝまやもしとくて此まつこ引へし松せしつゝ夜しわそめ此世を

懷舊

おもかけは海ものの海にしれんかしに苔と志れて浮世にくり

夢

ぬりむの夏はかけに海さりくわこれ世ささむる松をして

玄常

かけこけに松をしてりてぬ成之くわいつかはきわあすや後世

述懐

おもてそりひるさ世とはけてきん心はれられる御成なりとも

祝

さひやう心にさくもなりくりふとせもあぬ君が代れため

重奉和早寧百首 文治五年三日

詠百首和奇

春二十首

立春

よし野山かすまぬ今れ苔水とけ春波はまきはいと

子日

子日すう野へ乃小松れひさくまさし山しくとまきはあ

寝

夢見て秋みし山乃おもけに寝立そしまき寝かる

鶯

まきやとき苔れ鶯おもふさかしに白雪れふりすいつるり

若菜

もろともに出て人ぬ君かるなもかりぬ野へ乃口のるハ

残雪

心をもあらぬ別れなるわかはきてもあしきまゝ此雪かれ

梅

素乃顔八月れかつしまりすれ此ゝ梅此ゝ八まりひぬ

柳

しくときしかしかへまみとかはしまるひくまゝ柳此案

早蕨

いらひおりまし山ゝ此もりまりは春日のこやすし此ゝ此かな

花

けふこそは庭すや素此乃こまし梢へつゝ一夜此下風

素面

素も面をかれし人めよ面ちひぬ弟は紫ハ志けり面をつけて

素弱

ひきかへけれ此紫めくし雖殿を浦ゝ此見も弱此ゝ

海鳥

これはこけこしちれ秋もいるしんよし此まゝ此かへつゝりし

喚子鳥

くりり夜此月乃けのこれのまてもりしきしぬよふこそ

苗代

苗ゝそかへまくしきひかれ此面此々しへ乃素面

莖

すみれつむ花源衣寿とりこゝりてつゝ月弟此案

杜若

物りまゝ雨かみきわ此かきつゝをまれのこまゝ此案にて

荻

行春の後にしきさかれ荻のかなくつたりはそめやすらん

歎冬

きりてけり神は白山にふさは心とさへもけつるみいる

菅雲

雲のかゝるは山は志をわて心つゝ此ことはみん

菱十五首

夏衣

ぬきかつるせミ乃ゝ衣神ぬれて雲のかゝるは此志のひとへ

卯む

板ひさしくしくとりぬ山さともなき海は見ゆるかむ乃此

菱

天河ゆつきさらぬ雨ゆへは年はあふりとなはしきりくん

郭公

かしまはせまなきゆとせふともなめやせ海は夜の夕舎

菖蒲

風ふけくはゆ花の枝はあくすさしけさあやめ花の白ひと

早苗

あしはあきしもろ乃ゝやりせあひはゝやあまとけさ此海は志みよ

照謝

とりしまつ志けこうそこ此をわ衣神此志のつゝ家やさん

又月夜

とりそこしより紀の門乃いるん元さへとつるさしされ此

盧橘

和もすゝ花梅の紙梅く風乃口れなる曉の袖

蚤

蓑むし乃光そ花とくなるまてあしのまてくる蒲也

蚊遣火

うや里火乃ほゝつり乃浪や草の花ゆらるゝ野の花ゆらるゝ

蓮

朝夕よ口のあり古ゝ花志るへをよくるれむしかさらすの

氷室

いとひゆるこゝろもてるしひむろ山ゆつ一の後の花の下せ

泉

よろひつゝ人ハ此こゝろ乃ひきて蓑よ志られぬ宿の海水

蒸和稜

見そきすゝ志りし人をすあさ此紫も三ヘ雪すりそ此世を

秋二十首

立秋

けしとのへ人楷よ秋乃風立て志ゝ此なけきも多ゝるし

七夕

秋風やいく成ましむ天河君ゆりよひ此ゝ志れ此とこ

萩

ちらハちれ落口けゆるん萩原やぬれて此後乃花此ゝ志

め郎む

志のめよ口れし袖此夕此夜とよしめくみすゝ女郎むや

薄

人をとへあれるん枝此むし乃君もうへとしすゝ秋ゝ

荊薑

わさ海にまゝ[illegible]

蘭

旁のまゝひと枝おしん[illegible]

萩

萩のえに[illegible]

鳥

旁ぬかに[illegible]

麻

[illegible]

[illegible]

旁

[illegible]

槿

[illegible]

弱蓮

[illegible]

月

月さよみ[illegible]

擣衣

[illegible]

虫

[illegible]

菊

一をしまゝ菊のみもせすまゝ菊ようつて菊のもとみんとい

和紫

あつさ山やまの道路をしてもみちはあつ秋風雲の

九月盡

とくれはちきしゆ秋のけゆへとりすくもしかり袖の

冬十又首

初冬

秋ゆゑ風をんしゆ雨しすみなれ秋の山さと

附歌

うへりみる梢にもれくるなりてつるさしやいはしくるしん

霜

なきそめてしみし菊の夜をよりへすもつしきみの霜なる

霰

わしれふる志りの山路に風こゝみねに吹まく浦のさ波

雪

秋ゆゑ狐なるめつる庭の面のれもみをつりる雪かれ

寒蓋

こゝ志ハせて波のあれのかをさかなしかれたまゆ吹しん

子鳥

なりきこ夜ハ浪心ゆめ乃さし風にすくねをそふる友子鳥の

氷

大井河なこ浪ゆをしに吹とあてこかりハ風乃もすこしかり

水鳥

よそへてもしるしやへにをしもしさりくの白にしきこしきに
細代
夜ゆへてはしるしもとるるあしろまにこしにこそ此月ゆすらん
神示
かとゝめし榊乃ゝ志まさよふけて成すこもつるあかりの元
鷲狩
とゆるなよりくのをしまり衣宮此みれは元はきらとも
炭竈
をの山やしるこしきひし紛々はこれすに海此焔つん
燈火
うつゝ火乃光ともいよつきいてさひしくひく鐘乃音に
歳菩

なしゆるなる命いわれてまそあゆるさゆる年此れなる
意十首
初意
店此世紛けてやうひんゆつきすにはけぬ此まこれる
悪意
昔つとに見まへてさよ衣なれぬすけきに年そうさなる
不無意
あひみての後此ん紛まつきれてつれるしてこそ元をこしみね
初無意
なまとこのみなしまけぬ雨なりまよそ此なけぬ此ちへまさらん
後鶴意
いかまをむ菩まわかよみ菩此恵まひますと鶴此海と

逢不遇恋

とのつゝら人もとはれまさひいそ[illegible]世にさひ[illegible]とん

[illegible]恋

[illegible]

思

いとゝわゆゑに[illegible]月日とも[illegible]

片恋

よひ[illegible]

恨

[illegible]世[illegible]

雜二十首

暁

[illegible]暁の[illegible]

松

[illegible]

竹

[illegible]

苺

[illegible]

鶏

[illegible]

山

[illegible]

川

初霜のふるまに人の思ひ出ける事共書たるを

祝

天津空月日のかけにてらすまて無く迄のよ宮もちひさく人

花月百首

詠百首和歌　建久元年秋左大将家

花五十首

権少将

桜花さきにし日よりよしの山そらもひとつにかほる白雲

わきて猶の山かせこそさくらさく白雲はなにゝほふ春の

花さそふかつらき山の春かせはのきはにみえてかをる花

みよしのゝ川岸の桜花ちりしけは花のかゝる天の川浪

桜ちりぬ梢に風のなれてくるもをしき花の山かせ

花のちるやよひの空にさくらさくみよしのゝ山のそこ

さそはれぬ花もあらしのなかれにまよふ霞にみゆる雲

わくらはに月もなかめて桜にかゝる雲の山のはも

よしの山霞のうちにさく花のさくらは今こそさかりなれ

ゆきかゝる名も霞めるにわか花はさかりの雲かゝる岩

たゝるゝ日よりそのへに山のはに春の花にさそはれて

百敷や野へしる庭の桜もてけふかさしに花ぞちりける

きのふけふ春日野のはなのさかりにかへる雲のちらぬ

家人の袖よりゆくへの桜もひとりあかす雲のゆくへに

まれにきてけふ人のこゝろまてものおもひの花やちり

こゝろありて柳のうちにむすほれみたれてまよふ桜

春風のなごうす宮にまりはりの花のみさきの岸の風松
やまくれ風のさらへにみるむとやそさそふ苔川の水
山梅すてともいくしちりぬとてさひまさへきむしなれ
いまして風のつくさ紙ひすれるん梅にあらぬさくら春て
梅むさふ雨うちとすれぬなくさあくてぬ春のちきりに
ひひりに花紙くしむる春とうる風の行来に心すにて
花紙さふ心すやとる海くすに秋まさへと風の音に
ちりぬとてなとて梅紙くみくんちすに面しかふ此庭
あとさへしみさへ此庭に春くれて苦りやむ此さとにくらぬる
吹風もちるもかしむを年ふれとしうりさらぬ花のうへに

月又十首

秋は来ぬ月は来ぬまよりそめてとき不なき袖の露かな

さくのかり月の光にことそひて秋の夕なるかりかひの見
これそこの海にかけし秋の夕なわやつやとけてかつ月かけ
うそふれも秋来て後の月の夕紙かりめくとさかる袖の
秋といへて宮にむ月紙ちきわとさて光すらとる萩の露
あさとへて心ようふ月鏡とさるうむすふ宿の海し水
仕宮のうへ之の海にしめられ弟のみ此露に月そやとれる
わうさかし山井のさのたよくあいさつくも月の鏡そやと
梅くさ此里の籬はあれて於とする露に月そやとれる
さむしちやすつよの秋の風かけて月とさしくらの鶴夜
なまとなくなこし秋のうすとにはなむる月のあれとそなる
その海月やりはりはいぬなみさる月やうつき秋もうら
あつすや此すやのあれ此露かけて月の光と袖ぬしかり

拾上ノ下

十題百首　建久二年冬左大將家

詠百首倭歌

天部十首

權少將

久かたの雲にすみなれ出る月のくまもしろきまゝ春なり
いく秋の雲の紙一枚まきしかしにあまり月のかけ
をしくまのあまのまき出代と雲まで早のやとりのかけ
天河とし乃ひこわれ秋けてさやかなりぬ夜の夜乃やこ
えなるしと見るれしまなしつゝ妻の夜にさむるこしの夜
こゝへしなゝ川とかしぬ風乃吉まなれし昔の外に来ふと
見すしらぬこゝろもれぬ夜のあしやこれ夜の月ひかり夕暮の雲
かふくれぬあすさへふしん夜ましそなりけん人のやとも見ぬ

山日ころさしぼる時にきこりてあらはれたりて冬の夕雪
うきくらす物の光まかすみてなりめもあへとあつる白雪

地部十首

あらまし苔むす苔のおくの色を世へめくん見よりの山
口ひ河海によせてハくつ志きなるのしめしそも知人をなき
ゝ河なるを乃海なく時なきおしハ海く見れなあらぬ夕なく
まれくつゝ也の時に秋をきて和歌なるわぬ宮浜の河海
をしのぬるわしのれまの宮沢冬こそ池のさりなりかれ
口るつむをらのさへ乃あさみしわ龍の水の春の夕なる
秋なくいりはつわ乃夕かん月まつ宮の海のこゝ時
月乃さす実や乃かけの月なきに一夜ハあけぬを海の臨
志るへなきとこゝの橋より海よひ又とこゝの物やあるん

かるともかゝりわ人やしらさしん家本の野へ此夕雪の夕

居所十首

わしきやりうしらむ乃明くさに海くもつゝ猿の雲
く海りなきさし乃さく此の月なれたる秋の人
あさつまあさむるとのけさまつゝ此夕なる此かけ
やとゝしよ山そ見ゆる海ゝ海するむの都の中やひさゝ
むすさゝへかんあしもふりにそわ雪ゐとゝ海りすゝ
見るれぬるよしをいりに思ふんかさるあるのさらにとりて
しひ花あさひ夏の夜のさめぬしんしひあしのむまやも
栗の夕らしてハかきわとしあすとも雪けるへき山のかけの
霞君乃をくて乃山田かり孫して袖ありまふる此さむ
出てこし乃此さし原しけわあひて誰なるむしん夜の乃月

草十首

年のうちハ今ハ此ニ時まあつ山者ハかさしあれとかけてまつる
非代わ笑ありてや山あゐもしわつ衣の夕とるるしん
さやかなり西しゐまかされ日かけ者ハ芒明此ひりませとや
花もせまさけつよまさしかけるひさ人かけまぬ秋風を吹
あれしまふおくなりしと乃せひ者ハきしなん好や夕ハ出へき
あれなくわ釣の下草ハ紫を蔵しけし志のふ此と立此白雲
紙とせふ浦のを海ゆふいくへかハかさして人紙かつこの海も
さくらあさ此あふの志さ雲志さまに此こけて松ゐるよ夜の
花志くや海しるかや梅乃をのれのこうら吹風にみられてそみ
なれてとおりふせまよりつ

木十首

草も木もひとりにまあつ雲此うちよくへ人ぬ松此夕を結まる
いそのうこ梅此秋梅りぬとさしさんうれ此けハかたし
まはりくや桂東乃志けこうさるて黄此紅を易てそみる
くふみれくゆこきうれしまりまくりくて是へ此櫻此々殺
さひ桂椎乃志さ紫をおけて袖も唐もひとり夕雲
月もいき桂乃ゐ梅うさ山此かけ雨そつこふ志つこをまし
鏡山みさ立てらむつくさかけもくりぬ云乃空ある
夕まき雲風吹しさし桐乃くまそよとさし此秋まあし
時雨りくの立えまに風ひて心夕清く秋乃山さと
桐よわ此山ゐせらしかしいせ此のこ雲なし此ハ柏

鳥十首

志のふ山こさらのあくまかしまし此その雅りや人まし

人ならみな渡しそのひろれんかてこの中よ
こし山うくは風乃ひさまさり本を渡ますしかひてくの
わさおかう夜九ちうさりよ明けうろ文の夜は渡しりけりのよ
おさつうきしは川かふやや九野しうよ路しよ経とえそちうか
しまさて世を梅の夕やれ折よたむ蝉のさすみれ声いく添
表面の梅りすきくとききてこれれ渡く比ちりますみさえは虫
そのつのうちえそく冬を月日へてあけれんきを九生きをうくえ

神祇十首

てらしんん神路の山九狗白ける渡したとけのるる神なる
かり渡のやひくく杉原とぬれとる恵みきさえて神のまむく
春日山みよの杉原梅て風乃香井よかうきよろ代の玉
神さますえしかの野へのひめ小松かえ代千とも祝ふ絵えそくこえ

かすか山やいくよ九人をみつまて九世かまわかれかくらん
身のりいの暁ときうら月けのそれもむ人みよのさけ
契りけよせふよさのしうのねぬ渡て月九窗九白山
ひうらろちの山けのうみん人みえれなけさまよのやこ
わのうしのきたにんへよすきくわれとはあるやまみよの松
やうろひらさやまよてし九さむ日よし九七の御社

釈教十首

歓喜地

これさ乃渡まさしもしと雨もさすうことこと世九図をぶえ

無垢地

いさぎよくみくいうくりなかはい刃九く写え九さうひとをみう

明地

あきはけき朝のけはあらしに山雪も水もさきぞくさくる

焔恵地

冬かれのとゝろのふるえりに浅きて吹かふ風は花をちらしく

雛勝地

天津風さゆりし空は吹とちれし女花をうゝ花は白ひらく

現前地

すゝ海さる地の心はあらはれて金花さしは殷そよせらる

遠行地

さゆりすくとゝろ紙ひてす橋なれ紙あらやふそふさくひさ みを

不動地

そののして海りすゝ此紙はそひてゝゝゝ花紙にあらそ

善恵地

たゝりなきむのりろ人なひきて海さるゝさ此かひ[illegible]

法雲地

おひ見此法乃雲ちよすむ月此かきりもしゝ光をそみる

奇合百首　建久四年秋　三年給題今年郵便所依別儀於被召此所

詠百首和歌

春

元日宴

春くれはたゝりし乃位よりけみてを井此ゝ出ることやめ

雛宴

夜あ人をなる紙梅るをよ穴ゝちて春梅梅るさゝつゝ雲此りて

権少将

雲氷

氷のすきまの白波立てりまつ雲のさ池の芽もれ

若草

とそくとくとのりさ海くさく花のひとりにさしの雲のつ芽

賭射

りしきやいてひく庭のあつさちむしまへりまつまあふる

野梅

みな人の雲のんのうよひきてるれぬる野へのむのかけるる

雉

ゆりきしのるりし野原も夜けて子とさふ夜や春雨とふん

屯雀

来とゆきつくの志りふ折るひさひくりまくの雲の夕くれ

梅絲

くりくし雲のいとゆふ来世へて寄すみとりの光をみ申ん

春曙

夜ふむしくひとまさらくれて雲まこもれりやとのゆゑの

遅日

なりめつひぬ光のとりまかすむ日をむさく山ハすとひとり

志賀山越

秋の雪穴吹風とひとりにてむまにはつ志りの山をし

三月三日

せく人のわとゆつてふさうつまの時志てさふかふすきまかり

蛙

なのるりかれのくすまゑのあるを田まかるりはまゑのれしむ

残暑

秋来てまた秋夕風は秋ぬれ[illegible]

乞巧奠

秋ことにあらぬかりおひ[illegible]

稲妻

[illegible]

鶉

月をすむしさとは雨とにあれはかり鶉[illegible]

野分

秋のたまかたも風の秋[illegible]

秋雨

[illegible]

秋夕

秋よりあらぬすそ[illegible]

秋田

[illegible]

鴫

[illegible]

唐津池晩[illegible]

[illegible]

蔦

[illegible]

柞

[illegible]

九月九日

いとひとさてる紙也月とちきりのくふつむ菊此末乃白露

秋霜

とけて孫ぬ夢ちも霜よむすれまつ志ろ秋ぬさしき此袖

雲秋

ありあけ乃名にわ秋乃月けよりもてくる虫此ア五

冬

落葉

かけおむるめとしつゝ落此多よるさ紙精此多よのこさ人

残菊

白菊乃ちらぬのこゝ多かりよ春ハ風をとうしみけるの

枯野

落るさハ程へ乃ふ事此面けハ花のくるひ、落りりや

野もり草

かわ衣とゝろの居と立てゝわ打ちろみ白き程風さむけ

霙

この山の嶺乃むすせ梅きゆよひ桂の紫つゝひみれりきぬ

冬朔

ひとゝせ紙るめ一くせ紙あさア此まうす宮こゝろさひさのこそ

寒松

あらそれて又冬こりの宮此ちよさもとしふるさ松の夕ゑ

椎柴

志ぬ柴ハ冬こゝ人にしられ夕れ事とふあられの三す本ア

衾

別恋

よしさらはとはぬのミそ恋しなんとてもまたるゝ身をはなれて

稀恋

年をへてまれにあふよもくるしきて我こそ恋の名をもなかさゝ

後恋

なさけあらはそれをわかれて今の身のわかれを思ふゆへなる

怨恋

あらさらむ後の世まても怨つゝそれその契の数に涙そ

旧恋

いつはりの世をしらぬまてこれ年月はとはぬわかさらん

暁恋

契りけりわかれよりくるしきはあかつきの空のくもりきぬ

朝恋

きぬきぬのわかれの山に立くもや今こそ君かあさのまと見え

昼恋

おもふ事のありてはひるまもわか心なさけのかたみにたのむ

夕恋

くれはまつ秋のゆふ暮さへも人のまちかねつる

夜恋

夜のまの恋侍つゝよはすきてつきさへにしらむころ

老恋

わすれぬ身とてハよの中の世の中にもあらぬ

幼恋

葉の緑のこゝろは物をもしらぬわかきほとハまたはしめなり

春恋

うるしよにさうひとるゆきしてなきにおまてやすそよう行人

近恋

漁をく袖乃よそめなるしへともつけ行すやしとそなひ[illegible]

[illegible]恋

あつ[illegible]ゆきうなみさうる[illegible]乃桜梅花よつれく

寄月恋

やまとひに出すし海乃月ゆけつるみさのこ袖にまてとも

寄雲恋

時のまにまてたなりしたるゆしきりしもしへにあひ見てしかる

寄風恋

しらさるし[illegible]ゆうさ風乃[illegible]にもくも[illegible]秋[illegible]

寄雨恋

さりしすハおよひそ[illegible]袖にも[illegible]

寄煙恋

かきわるさしたるゆしひ乃行[illegible]そもしむ煙[illegible]

寄山恋

足引乃山路ゆ秋[illegible]袖[illegible]人乃[illegible]

寄河恋

いけ[illegible]ハ[illegible]家[illegible]

寄海恋

[illegible]人乃[illegible]

寄関恋

[illegible]

寄橋恋

人ゝ[illegible]

寄草恋

いとゝ[illegible]

寄木恋

こひしなハ苦しすつゝ[illegible]

寄鳥恋

鴨乃[illegible]

寄獣恋

[illegible]

寄虫恋

[illegible]

寄笛恋

笛[illegible]

寄琴恋

[illegible]

寄絵恋

[illegible]

寄衣恋

こひそめし[illegible]

寄席恋

[illegible]

寄極女恋

[illegible]

寄傀儡恋

一筋にすがりて此里に於ましすひまてをる人の繋ぬ

寄海人恋

袖にいまはしほのあまとしいはりせんかたねさくひはしひ今の

寄推夫恋

山ゐるゝけさこうおのをのれのこゝろしく思ふ恋の花に

寄商人恋

こゝろ乃市や日をまつ志川にそれなりはあすしらぬ成にくて

あつまし

正治二年八月八日追給題同廿五日詠進之

秋日侍　太上皇仙洞同詠百首應　制衣和奇

従四位上行左近衛権少將兼安藝権介臣　藤原朝臣定家上

春二十首

春来ぬとけさみよしの此おきかけ吹かゝすむ是此雪かハ

あらむ乃年のあつ緒待々しらふ花を出くこゝろを

春乃多紙とふひの於ちらぬれと二紫此口ゝ雪も消

りつ人乃ぢ多衣さらさ春さ春こゝろ春とは

うらはすとらるゝ人ハこゝふとゝまりひそなの登此物之

梅むすひ紙つゝ袖乃うへのきもり月乃かけそあらそふ

む乃此なすあり月よあつれて夏もさくらよみぬ此なる

もちとりし色やむ乃ゝ成なりて口成つゝ行長安の花

あわ所の月けれとう山此んを元ますてさこ川霞なる

さひ立山のいくへもしてやしまとしおりしへつゝりし

よし此山やしま心乃ゝりよわむ乃此とん元ましるしも

秋澤島四月此民の戸納まて[illegible]代も[illegible]

千五百番歌合是也　建仁元年七月進

平出無先例此此可書由内府被校参仍随時分

夏日侍

太上皇仙洞同詠百首應　製和奇

正四位下行左近衛権少将兼安藝権外臣藤原朝臣定家上

春二十首

[illegible]

[illegible]

新千首

内大臣家百首　建保三年九月十三夜海

詠百首和歌

春十五首

早春

参議

鶯と海と出やしぬまゝ乃をてしもいさす山風歌

春雪

わしの雪乃とも梅わくとは人山をのれ渚てやまとゝなへよ

野鶯

春風れ野へまかりさくむのえ紙志るへまきぬ景雪

海鹿

かさすそふ山にはてゆへる山やそれすゝ吹けは飛る風

開鹿

志るしぬ御山のうゆるし鹿まつる宮氏のそめハ

朝の菜

雅ぬめと海とわさ花のけぬかしへは袖ふりもへてまゝ心

庭梅

袖ふれし宿のうゝ氏梅えは妙る白ひはまゝ紙のまゝ

東梅

久しの月や白ふ梅のむ穴りも紙文は海へて

夕海鳥

くれぬるり山りしに紙さかけ乃をとは岩をひて海鳥室

栽花

物りとつる能まゝそ海さ梅むうへとく宿氏まゝ志れそ

待花

鹿さ川山のやまとわしとつてよいくるそれむ氏盛と

鶯花

島のうゝ鹿のうゝ紙志るへまてなりけるふまゝ山ふみ

放花

樹陰納涼

とつとのやゆつきかりよくろへて人に知まぬ秋風を吹

秋中又首

初秋

あらきおくさとあらぬ人乃稱さあまて地しひそむり秋の初色

行路萩

秋と紀の行路萩ましきこれ雨にぬさとりあへぬ雨にぬ

山家虫

松蟲のこゑまひるし當なりとつ第此客の山り也

夕萩

人心いりに忘れて萩乃此秋のゆふへにそよ紀そあらん

苔麻

さとしの朝行苔のおもひ出て新きす書やとふん

原麻

見るのもしくまの都乃山にて出しやと細きさ細りの上五

島月

秋の夏ぬれし神此あひに河のてとし此此あ雨に月にあれ名

江月

あらす秋ハいかに江の月のけ計こきあし夏乃詠ひこきまこ

浦月

久しき乃月のひかりゆしろ之にしきしの浦此なる此秋風

橋月

たりくすり嚴のかけ橋めくりあひてうしとしをぬ村月そきやけき

河月

やまとひは出るんとしても志ゝ也此とも山松の祿よの言葉く
志るへをよむ事あけのせとの松の風なりけり此志ゝ也別よ
かゝるんとそあさ乃あけのとも紀乃房こゝろ又ハ口ゆゑひなる
神のこゝろかゝるやとりし月芳此ぬれてのこゝを松やまとの
口すれのひそれもなりひのさゝ毎ゝ人をとゝぬ此ゝ言葉
居るよあるんあるをと松浦川へゝぬなこゝとゝあとそ志ゝ
枝乃そのゝるとそて乃山よ此ゝ苔乃下すそ松やこゝん
口すれぬ海乃つきりしゝひ口よかよひりさハ爲よみて

雜二十五首

猿又首　春芽秋冬曉

いけのまも人とゆよとくさて宿よ海し氣志此山もと
山後りせ乃いつこの猿松ゝすりもなき月そあけ行

芳乃房やくるゝ頃ことの秋風よさそかれけり猿此房
志きさゝ乃こゝろりてかれていくゝぬ芳はをみ松此夕景既
なりけよあらぬむしもさらそひて松志のあそこひ爲すこ

述懷五首　山河海里開

くるとあくと此りひし月日松乃房此山ゝつ松て年ハへ侍り
きゝをぬハあれいく世の此りひ川むすくしてせ此ゝきなみ
海ゝけらこゝあく毎のいこゝよいそらをさそぬれしなこゝ
あれ海くや海みの里此いそそまうき紙志てそれくゝ
いあ又開乃芳服毎ゝとゝもくまもしくひんくあとこそ此もく

祝五首　天日月星雲

くりりなきみとりの元とあつきても宮ゝ八子世とまつ祈に
みさ山松乃本此まゝ紙いつゝ日のさしてせしも此冬宮ゝん

秋の月久しきやとまかけるひく薪の仍ハよろ川世やへん
くりかるに代のうすくあらわれてひかさしは今年のやとり
やゝ人のよろひ紙を見のもめまでなとも此頃よりうる白色

神祇五首　伊勢　石清水　賀茂　春日　住吉

所紙を見れんいろよいあしてこのこゝしめ新川なるあれ紙けり
いけし水月まいゝ海をきゝわをうんこゝひかけみ秋乃なるんと
神よみよかりの川なる川なくわ流ふる道よりけぬこゝろ紙
いろわとさしいかるまを忍ま長日山をそくしきれ此所ん
かさゝわ紙つゝしけの名乃さしやとてゐるすれし此神

神教五首　大日　尺迦　阿弥陀　茉帥　弥勒

天津宮光紙けるよろ此成よなるの草のあもりて酒久
きさしき乃なるん乃宮をとうさ見まそ長乃宮ことあり月かけ

の重乃むれ入そる紙さしめれハ鶴乃ちやまさしかるし
中あ海ゐ二のちかひきよしてみかりまれ光をそ志り
花まかふよ川のたえとをうしてあるつまさしぬあふまれ

内裏百首　名所依未被行中殿宴　猶為密儀

初冬同詠百首和歌

春二十首　參議藤原定家

音羽河

とゝ川雪けり波と岩こゝて開ぬるまさ長ハ春ほかり

玉鴻河

梅かゝやすつゝろんかけきよしに玉鴻河の花の鏡よ

高砂

それなりしまゝハ世に此よんぬるさこれ高砂乃人此松のひとしか

春日野

ワるまつむとしつひ乃那とゝわかすれまゝ海ゝ高此あすや

三淪山

いさ海よ海川とも淮うみ此山人にしられぬ高此高砂ハ

葛木山

あとやさ乃かつらき山此なるき日ハ宮もみとりまあそふ糸ゆふ

手向山

しらあしいつれの神よ手向山花のにしきこれかさもさしぬす

伊勢海

いせの海ゆまりなるまさくし貝かひあり浦此玉乃女 [illegible]

志賀海

さゝなゝや志のむそのかすむ日此あらぬ白ひよしこ浦歌

三鴻

みしゆえ乃波にさかさすゆめとや此玉乃夜の森にうつる

塩竈浦

志賀浦やうらみしらけるあり浦りよりかりよへるまこの

宮深山

うつの山ワのもさにとりしゆきつる乃ワのんよ玉海そ

葦屋里

あし乃やゝ乃ワすむかる此ゆそ海なのうよ手むかへるさの

吹上浜

かなゝみかゝさし乃波此むゝ乃人にいとゝぬ浦乃吹上此海

さゝれはあまのく山ゑとりて世をそかれる[illegible]まさか本

大江山

夕をこゝおりの山のまつ秋をけるゝ[illegible]

難波江

[illegible]

義豆御牧

[illegible]

松浦山

せゝのたの夜ゝ秋[illegible]

秋二十首

泊瀬山

[illegible]

立田山

心あてのおりひの夕もさ[illegible]山はさしもそめし[illegible]

須磨浦

[illegible]

交城野

秋[illegible]

水莖思

[illegible]

小倉山

[illegible]

宇治川

[illegible]

常磐杜

とつ所のさまにしたれば杜の名深ぬ志つても杜見えたり

三室山

みむろやま時雨りやしぬさ此文のとのれつつ此の日書

高原野

ろ花まかれ月もこゝ雨との聲へよく雨なるを此の聲

伊弱山

いこ雨やまおしこと秋の文ゆゑ雨くてなめの東此りそ行

生田池

時雨ゆくいく田此れ此こゝに池のこくさも文ゆゑ比

淨見関

民のこゝひまひ弱もけすし秋ゆゑ波此秋の文書

武蔵野

ゆゑ事まゝ所の稱まとて波ゆゑ心さし此至

伊吹山

秋田やく文まそみ雨ゆゑ山ゆゑ也久しき下此ゆゑ

佐良之素里

くろうゆゑ月の稱に笑ありて秋の顔ゆゑ更科の里

白河関

白河乃関此を結りしいさむとも志つゝ秋此文にと雨

野鴻渉

ゆゑけれ日と夕雲にこそひて聖鴻まゝすゝ秋にし波

明石浦

とりし此乃わし乃ゆゑ此なゆも行ゑ雨とゝ秋此夕くれ

何武隈川

[illegible]

冬十首

清澄川

[illegible]

小塩山

[illegible]

住吉浦

[illegible]

交野

[illegible]

田蓑嶋

[illegible]

[illegible]

乳山

[illegible]

淀鴻原

[illegible]

安達原

[illegible]

因幡山

[illegible]

鏡山

[illegible]

恋二十首

伏見里

笛行乃梅みのさとに名のしていつれのよまうきとはうへさ

寵浦

まうすまうすみの浦と行みのよそまもしぬ人とひけ

石淵杜

弥まひのいそやのりまれいそ浦とも志れり下まほりの松葉

筑波山

わしほ山やまほ心そ行くそしほれそうひまさにもみちくるそ

神浦

神乃浦毎毎ぬむ乃くさけれよやそ細くうつ波の

益田池

人心いとし浦す田の池あまうへ人を戦ひ名とうしけく

高師濱

あらなみ乃あしの浦にそるれ松なれすかけてけれとなやと

阿波手杜

うらいとのあら乃むのとよりかけてあそれ松に分さはとや

志賀浜加波

結風まるしほ細くつ志うしそれけるわし波にとう神八

濱名橋

あつまちやそ浦すの橋まひく弱もさそ行けるあの波の岡

破間浦

梓ちいそ浦乃うしまひく細乃めまかけるうあそぬ悪なる

寺山

夜りすうしなきへ人ありる山にうしぬりや此のこやしう

佐聖布　紫橋

とろてよさの海橋ちかうよそれ也ひまこれ口うと

安積沼

いかまをしめさかの沼まゆしきく草なまつけて夜の沼と

松橋

ゆつかよ沼のひとりまこしみけ人海つまの有の有ふ矢

緒絞橋

とのしをなけきくて沼紫とてとこの橋手も絞ある

三熊聖浦

とき乃海の東の夜れ海ゆのやなけきそこへまを海の

鳴海浦

よそへよるうそ此浦乃やへ夜口すれ也とそまへ入れ口こしき

二見浦

ゆるみしいせ乃ゆ海萩志きさへ此夜ゆれて草もむすれ

名取川

すりり川ゆまてすむすれまれとりわ志ゆ袖れ志らこ

雜二十首

茅野川

よし聖川いとゝしいとこす故此ゆさまゆ絶そ口ゆ君の代

鈴鹿川

しゝか川やそせゆゑ口ゆみてくるとこゑ世なりきみ代ゆ此月

不盡山

天乃そゝ海乃志ゆ山志ひくこと姫こしきれ雪もけるよ

還山

いたらはぬうきやまとそくへ山かきまつ雪をとへとまつらん

海橋立

むまゝ玉乃東にて月のまゝむ里ハけに久かれ母のたゝ

明日香川

さられ石ハいたりとすれてあまり川ぬちせれ忘さらぬ世代

鳥根

すゑとゝ海きとりて乃みるまゝ志めよわ我世れもよみ雪ふらん

辰市

志きし海乃みちにつゝ山ハらつれ雪やいさ海ゝ志しぬ也海と

吹飯浦

こす飯につゝ世ふけぬのしみさそうちぬ夏も此にそみつ

布引瀧

布曳乃瀧にぬりと紙あしそひて紙とるゝ此いつれ海ゝ一

長柄橋

さもあらしあれなのこなかしの橋ちしらくちそハと此今志のん

玉河里

たつくりやさしすゝきしのあさ雨紙つゝぬるとぬ玉川の里

生浦

なまゆへうそこ乃見るあもはゝ乃浦にあふことす此名まつらん

佐夜中山

関乃戸紙さそひし人ハ出やしてあらめけれ月此さや乃中山

浅城野

むまひとさし秋乃さかれ落まわとこハ草此落まれ

角古川

水ぐるまのあとうきなかすもみさ川とうてやらん人をもとひこゝ

志加麻市

それぬまはまつあきさ方ゆきこゝあて志ら海ハ富ゝ出ら里ゝ

若浦

よりくへよくもなきさ乃ゆしかきうきつゝもしかりの後

お後関

宅まるゆあふ後山とかひそなき枝乃ふる葉ゝ多しみねん

御津演松

ゆらひしむしハいまも志のかめてくらしみつの演松

春日同詠百首應　製和歌

参議従三位行治部卿兼侍従伊豫権守

臣藤原朝臣定家上

春二十首

春ふすとうやと山乃あしさまわさ花あへぬむとをきとやハ

朝日さすうすけれとのしなのつゝ海つあらはし雪れ下草

あかさ乃海ちうき冬乃雪なくひくけぬ梅ゝ常をるく

梅むすれふやいつこそかうみや海の松ハ雪もけるくま

むれ玉乃夜乃まの風乃朝戸出ゝ志ふまるて今ゝ梅を

ふるとあくとめられぬ花ゝ常乃なきてうりふし冬をとへ

あくお玉乃うけ乃みとりゝ春うけて山乃志つくも時ハ寒り

あさみとり霜さるひく山かつのうろも春夏色まいてて

あをまりしるしの花乃玉柳冬まもしるく春ハきゝにくり

花の名とくらん夏乃つれしと山へもよかす花れ下ひも

雜中文首

先撰二百首之愚歌有結構事仍可謂拾其遺文

粮和元年企百首之初学建保四年書三巻之家
集後是之間再居拾遺之官故為此草名
建保四年三月十八日書之　参議治部少兼侍従藤判

関白左大臣家百首　貞永元年四月
詠百首和歌

霞

[illegible]

權中納言定家

[illegible]

櫻

[illegible]

蓄雲

[illegible]

秋乃月ハ海ニ入ルよのなかそらにあまりて地にしきなすしき

和紫

山ひめのこきまうす紀となるへなくひとりに深ぬ雲の紀の紫
やゝ海人乃たひて久かりしかはしき紀いそ異紀の紫ん
志くれいて神とてまゐさぬ秋乃日にさこそみ山ハ紀山ハそむ
新田山神のみけにこしくとやくれ行秋なきをうしむ
とりとて和紫より紀ハ秋乃夕の紀さそとなりにゆ本柱

氷

氷ぬてぬき中に河乃ゆしとわかりのひに紀あと紀ぬ
せゆしゆみなハ河ハなみ川そうもあらんに氷とらいく
冬の夜乃なり紀ハしわハ志れまき孫なくにあつる神紀つゝ
神乃人ハ河をとりそそ吹風とこれ月かけ

氷のこむもしふさ山のいけ水にみくりと表ぬあらはし

雪

ぬひくハ雪のこしらすれぬ雪のしかなとふ不すす御ことは
いたりに杉の雪こそつりたりしめけるの山
いそのこゝ物ハ雪の名をわつりの日子紀元に南也
夏にも里乃なのこやれこうん宮もあるさのあちこ
ゆれけわ山ら紀まけてとひくん南さにゆうき雪の
しきに

恩恵

雪しの夏のハしわにひとめしたりて南
あくさの人つてるしぬ紀にさに雪の心分紀もなるさす
人ゆうきひとれのとさて原志くれぬ恩ハうき物りは
白雪乃ぬくとんなけくとらわと夏乃さちやこれにしん

[illegible]

不遇恋

[illegible]

後朝恋

[illegible]

[illegible]

逢不遇恋

[illegible]

恋恋

[illegible]

石のへの人としけきありひまゝ君のぬりたる杖をいそぬる

猿

都出て朝たつ山のあなたけよわ雲をきとめぬ秋風歌
夕日新さすやとくへの雲さしぬ一夜のやとしてのこそ行
あしてよとあるかりけるをひて猿をしあれぬ
なくさ海すいつれの山もとゝまれ宿をとゝまれ此月のひ
ぬまれぬと海松をしのいと海くら袖をしらぬしらくるゝ夜

山家

ゆ紙をしりしやゐる苔紙をしてゐ郡の月はいつる山みち
松風のとゝますゝをん山人のりとの心ハる海やきこゝん
月はぬく山風ひりやむかへをんみるゝ此山のきりのかゝ石
苔うしの海をの折の夕鶴よそあつかしすみしらしや

ここなるゝ山をしき雲此おき海は神のきつくは郡のすすす

眺望

りしきのへ紙いつるよゐくは海をぬはむふかへ
吹くしふりみちのへの雲をわけて嶺をしらるあし山を
いけ川ゆきを乃みハらはるそしそのれは秋や風をしら
津の山乃うやさくしとしともみハ海乃山此雲此きて
そのあらしれ雲をやきくるん風けきあるあ此はり

述懷

神風やみすそ川は行とさし心乃そこやあらさりかん
そのうえ乃ひかけてしまかけさしは此此有とるかい此故に
海しえ此ふるえ乃蓑此雲乃日は梢乃起をしてそ
しらしすは世はあわ明の月は知てこそひそく鶴の